

最新版(英語版)はこちら

最終改訂年月 : 21 February 2003

背景: イブプロフェンなどの非ステロイド性抗炎症薬は、炎症性プロセスを特徴とする病態の治療において役割を担うと考えられている。イブプロフェンは、アルツハイマー病の病因と関連性がある炎症調整効果を減弱させると考えられている。

目的: アルツハイマー病患者におけるイブプロフェン投与の有効性について調査すること。

検索戦略: レビュー本文に掲載された(多くの)用語を用い、2002年12月10日にSpecialized Register of the Cochrane Dementia and Cognitive Improvement Groupを検索することによって試験を抽出した。CDCIG Registerは定期的に更新され、全ての主要な医学データベースおよび継続中である多くの試験データベースから得られた記録が含まれている。また、2名のレビューアが、独立してコンピュータ・データベースおよびイブプロフェンとアルツハイマー病に関するインターネットサイトのシステムティックな調査を実施した。AD患者の治療におけるイブプロフェンについて継続中の試験に関するデータを求めた。

選択基準: 国際的に認められた基準に従ってアルツハイマー病の診断が下された患者の治療におけるイブプロフェンの有効性が調査された、単独施設または多施設共同のプラセボ対照ランダム化試験の全てが、本レビューの登録基準を満たすこととした。選択した試験の選択および方法論的質にバイアスが生じることのないよう、登録基準と除外基準を特定することとした。

データ収集分析: NTおよびHFという2名のレビューアが、独立してデータを収集することを目的としている。選択されたデータには、ADにおける認知、行動、身体、心理の各分野が反映されることとなる。

主な結果: 既存の全てのデータベースおよびその他の情報源をシステムティックに検索したところ、ADでのイブプロフェンの有効性について評価されて終了した、本レビューの登録基準に適合するランダム化二重盲検プラセボ対照試験は抽出されなかった。加齢に伴う記憶障害におけるイブプロフェン投与について評価された1つの二重盲検プラセボ対照試験が抽出されたものの、現在のところ終了していないため、データを手に入れることはできない。現在では、認知障害をきたした患者でのCSFベータアミロイドに対するイブプロフェンの効果、およびAD患者におけるナプロキセンやロフェコキシブなどのその他NSAIDの効果について評価するため、1つの試験が進められている。

レビューア見解: 現在のところ、アルツハイマー病を有するとの診断が下された患者においてイブプロフェンが有効であるか否かに関し、ランダム化二重盲検プラセボ対照試験によるエビデンスはない。イブプロフェンはその他のNSAIDsと同様、鑑別可能であるとともに有意な場合もある副作用プロファイルを有しており、消化管出血もこれに含まれる。従って、このような治療によるベネフィットが副作用のリスクを上回るものであると示されない限り、アルツハイマー病患者へのイブプロフェンを推奨することはできない。

Citation: Tabet N, Feldman H. Ibuprofen for Alzheimer's disease. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2003, Issue 2. Art. No.: CD004031. DOI: 10.1002/14651858.CD004031.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Dementia and Cognitive Improvement

* ご注意: この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。